

# 日韓ドイツ語教科書における語彙の量的比較<sup>1)</sup>

吉 満 たか子

広島大学外国語教育研究センター

## 1. 研究の目的

広島大学からは毎年10名ほどの学生が、夏期休暇中にハンブルク大学のドイツ語サマースクール<sup>2)</sup>に参加している。本学からの参加学生はほとんどが2年生で、1年時に初修外国語としてのドイツ語を4単位もしくは8単位受講<sup>3)</sup>している。このコースには日本以外に韓国と台湾からも学生が参加しているが、帰国した学生からは、「自分の語彙が少なくて苦労した」、「最初は言いたいことが言えなかった」という感想と共に、「韓国や台湾の参加者のほうがよくできる」、「韓国や台湾の参加者はよくしゃべる」という声もよく聞かれる。筆者も2006年8月に現地で授業見学を行ったが、クラスのレベルが高くなるにつれ日本人の比率が低くなっていた。またレベルに関係なく、教室内で活発に発言や質問をするのは主に韓国や台湾からの参加者であり、日本人参加者のほとんどは、教師から指名されれば発言するが、自発的な発言をあまりしていなかった。

高いレベルのクラスの参加者は、ほとんどが自国でドイツ語を専攻している3年生や4年生であり、これらの学生が本学からの参加者よりもよくできるのは当然と言える。また、外国語習得の役割や言語コミュニケーションのスタイルは国によって異なり、日本人参加者が教室内で比較的消極的な態度をとることは、大学以前の公教育において社会化がどのようになされてきたのかという問題や、それぞれの心理的な側面にも帰することでもあるため、それをすぐに改善することや具体的な処方を出すことは難しい。しかし「語彙が少なくて苦労する」のは、本学からのサマースクール参加者だけの問題ではない。語彙の豊富さが外国語を用いてのコミュニケーションを大きく左右するということは、おそらく誰もが感じているのではないだろうか。語彙の豊富さは、学習者それぞれの学習時間や習得の度合いが大きく影響するが、学習に用いる教科書や学習法とも密接に関連している。特に教科書は、語彙だけでなく、語彙の運用に必要な文法の学習内容も決定するものである。となれば、ドイツ語でのコミュニケーションに「苦労」を感じさせないだけの語彙や文法を学ばせるには何を改善すればよいのだろうか。

筆者はこのような疑問から、日本と韓国・台湾のドイツ語教科書の語彙を比較調査することにした。ここでは日韓ドイツ語教科書の語彙の量的調査を報告する。

## 2. 調査の対象

調査の対象とした教科書は、日本および韓国で出版されている大学生の初学者を対象とした教科書それぞれ4冊ずつである。日本の教科書は、広島大学において教養教育科目として提供されている「ベーシックドイツ語Ⅰ」（前期開講）および「ベーシックドイツ語Ⅱ」（後期開講）で2006年度並びに2007年度に使用された教科書のうち、その内容が「文法」や「講読」等に特化しない、いわゆる「総合型」の教科書を選んだ。これは、入手した韓国の教科書4冊がいずれも「総合型」の教科書であったためである。

調査対象とした教科書は次のとおりである。

#### 《韓国の教科書》

『Alles Klar! Deutsch für Studenten』(2000)

著者：ドイツ語教材編集委員会

(チェ・ムンギユ／イ・ミンヘン／イ・ウォンギョン)

発行：延世大学出版部

『Deutsch heute』(2003)

編者：リュ・ジョンヨン

発行：文藝林

『Fröhliches Deutsch』(2000)

著者：キム・ジュヨン／キム・ミラン／チョン・ソウン／シン・ヘヤン

チャン・ヨンウン／ク・ミンチョル／E. J. Jungk

発行：淑明女子大学出版局 (Sookmyung-Frauen-Universität Verlag)

『Lebendiges Deutsch』(2001)

著者：イム・ウヨン／カン・ビョンチャン／キム・ヘセン

パク・ジングォン／ペク・イノク／イ・ワンホ

発行：文藝林

#### 《日本の教科書》

『Abfahrt スキットで学ぶドイツ語』(2007)

著者：飯田道子／江口直光

発行：三修社

『Ein Sommer in Hamburg ハンブルクの夏ー初級ドイツ語総合教材』(2005)

著者：岩崎克己／田中雅敏／吉田光演

発行：郁文堂

『Farbkasten neu 1 自己表現のためのドイツ語 1 (改訂版)』(2002)

著者：板山真由美／塩路ウルズラ／本河裕子／吉満たか子

発行：三修社

『Modelle neu 1 問題発見のドイツ語 (改訂版)』(2007)

著者：Andreas Riessland／藁谷郁美／木村護郎クリストフ／平高史也

Marco Raindl／太田達也

発行：三修社

### 3. 調査方法

それぞれの教科書に現れる語彙を、初出の1回のみカウントした。したがって、本稿の「語彙数」が指すものは、1冊の教科書全体の総語彙数ではなく「異語」の総数である。

カウントする語彙は、原則として独和辞典の見出し語になっている語とした。使用した独和辞典は、『独和大辞典第2版』(2000 小学館)と『クラウン独和辞典第3版』(2003 三省堂)の2冊で、どちらか一方に掲載されていればカウントした。また、次に挙げる語彙は除外した。

- 1) 人称代名詞
- 2) 所有代名詞
- 3) 定冠詞
- 4) 不定冠詞
- 5) 否定冠詞
- 6) 関係代名詞
- 7) 定冠詞と同形の指示代名詞
- 8) 数詞と序数
- 9) 国名を除く都市や人名などの固有名詞, およびそれらが基になる形容詞  
(例: München と Münchner)
- 10) ach/ah/oh など, 意味が容易に推測される間投詞

1) から 5) (代名詞や冠詞類) は基礎的な語彙であり, すべての教科書に共通しているの  
調査の際に処理する語彙数を極力減らすために除外することにした。6) 関係代名詞と 7) 定  
冠詞と同形の指示代名詞も同じ理由でカウントしないことにした。8) 数詞と序数はすべての教科  
書で導入されているが, どこまでの数を導入するかは教科書によって異なり, また体系的に無限  
に増やすことができるため除外した。9) 都市名や人名, 社名などの固有名詞も除外したが, 国  
名はその国で話されている言語の名称とも関連しているため, 重要な語彙とみなして数えること  
にした。以上のようなカウント方法を用いたため, 実際には, 以下に述べる数字よりも多い語彙  
が教科書には登場している。

語彙を数える際には, 次のような点に留意した。

- a) 同じ語彙が繰り返し登場しても数えない (1 語 1 カウント)
- b) 動詞の人称変化形や過去形, 過去分詞等はその不定詞と同一とみなす
- c) 形容詞の比較級や最上級は, 原級と同一とみなす
- d) 自然の性に従い, 男性形と女性形がある名詞は同一とみなす  
(例: Student/Studentin)
- e) „Bitte!“ や „Danke!“ のように, 動詞が基になっている表現は danken/bitten と同  
一とみなす
- f) 動詞の不定詞と同形の名詞 (例: essen と Essen), あるいは形容詞と同形の名詞  
(例: deutsch と Deutsch) については, 辞書に見出し語として掲載されていればカ  
ウントする
- g) 見出し語として辞書に掲載されていない合成語はカウントしない  
(例: Hochzeitswagen)

#### 4. 日韓教科書のページ数と異語数の比較

上記の方法で語彙を数えた結果, それぞれの教科書のページ数と登場する語彙数 (異語数) は  
次のとおりであった。

表1 韓国の教科書のページ数と異語数

	Alles Klar!	Deutsch Heute	Fröhliches Deutsch	Lebendiges Deutsch	平均
総ページ数	201	224	185	224	208.5
課数	20	15	14	10	14.75
1課あたりのページ数	1-10課：8 11-20課：6	10～13	6～11	15～20	14.8*
異語数	1995	1285	1005	1142	1356.75

\*1課あたりの平均ページ数は、総ページ数の平均を課数の平均で割ったもの

表2 日本の教科書のページ数と異語数

	Abfahrt	Ein Sommer in Hamburg	Farbkasten Deutsch neu 1	Modelle neu 1	平均
総ページ数	89	96	87	95	91.75
課数	10	10	12	12	11
1課あたりのページ数	6	7または8	6	6	6.37
異語数	703	942	736	742	780.75

日韓の教科書のサイズは日韓8冊の教科書すべてがB5サイズであるが、韓国の教科書のページ数は日本の教科書の約2倍である。課(Lektion)の数は『Alles Klar!』を除き、日本の教科書とそれほど大きな差はないが、1課あたりのページ数は韓国のほうがいずれも多い。また、異語数も平均すると、韓国の教科書では約1356語、日本の教科書では約780語となり、韓国は日本の約1.7倍である。

## 5. 語彙のレンジ

日韓教科書の語彙を個別に数えたが、日韓それぞれ4冊をひとまとまりとして異語の総数を数えたところ、表3のような結果となった。韓国の教科書4冊での総異語数は3341語、日本の教科書4冊での総異語数は1705語で、総異語数でも韓国は日本の約2倍となっていることがわかる。

表3 総異語数

韓国の教科書	日本の教科書
3341	1705

次に、それぞれの国の教科書で用いられている語彙のレンジ(使用されている範囲)を調べた。例えば、日本の教科書4冊すべてに登場する語は「日本レンジ4」、3冊に登場する語であれば「日本レンジ3」とする。同様に韓国の教科書4冊すべてに登場する語彙は「韓国レンジ4」とする。その結果を表4および表5にまとめた。括弧内は、それぞれの国の教科書で使用されている異語全体に対する、各レンジの語彙の割合である。

表4 韓国の教科書における異語のレンジ

韓国レンジ4	270 (8.08%)
韓国レンジ3	348 (10.41%)
韓国レンジ2	579 (17.33%)
韓国レンジ1	2144 (64.17%)

表5：日本の教科書における異語のレンジ

日本レンジ4	243 (14.25%)
日本レンジ3	194 (11.37%)
日本レンジ2	313 (18.35%)
日本レンジ1	955 (56.01%)

韓国ではレンジ4が全体の約8%であるが、日本の教科書では約14%と若干高くなっている。レンジ3およびレンジ2に関してはその割合には大きな違いはなかった。しかし、レンジ1では韓国が全体の約64%で、語彙数が2144語、日本は56%で995語であった。詳細は別の稿にゆずるが、日本の教科書では全編を通じて登場する場面やテーマが似通っていた。他方、韓国の教科書では、前半に登場する基本的な日常の場面（あいさつや自己紹介）はどの教科書でも同じような傾向にあったが、後半に導入されるテーマは教科書によって異なっていた。このことが、韓国ではレンジ1の語彙が日本に比べ多い原因と考えられる。

## 6. 日韓共通の語彙

日韓それぞれのレンジ4語彙を比較し、日韓の教科書8冊すべてに共通する語彙も抽出した(資料1)。その結果、日韓の教科書すべてに登場している語彙は140語であった。この140語以外の共通する語彙は、韓国の教科書で130語(資料2)、日本の教科書では103語であった(資料3)。各国のレンジ4語彙および日韓共通のレンジ4語彙の教科書別含有率は表5および表6のとおりである。

表6 レンジ4語彙および日韓共通語彙の教科書別含有率《韓国》

	Alles Klar!	Deutsch Heute	Fröhliches Deutsch	Lebendiges Deutsch	平均
異語数	1995	1285	1005	1142	1356
韓国レンジ4含有率	13.53%	21.01%	26.86%	23.64%	21.26%
日韓共通語彙含有率	7.01%	10.89%	13.93%	12.25%	11.02%

表7 レンジ4語彙および日韓共通語彙の教科書別含有率《日本》

	Abfahrt	Ein Sommer in Hamburg	Farbkasten Deutsch neu 1	Modelle neu 1	平均
異語数	703	942	736	742	780
日本レンジ4含有率	34.56%	25.79%	33.01%	32.74%	31.53%
日韓共通語彙含有率	19.91%	14.86%	19.02%	14.86%	18.16%

表5および表6からわかるように、レンジ4の語彙の含有率は日本の教科書では平均31.53%であるのに対し、韓国の教科書では21.26%である。また、日韓の教科書8冊すべてに共通して使用されている語彙は140語であったが、この日韓共通語彙が含まれている割合も、日本の教科書で18.16%、韓国の教科書では11.02%となっている。日本では、いずれの教科書を用いても3割程度は同じ語彙を学習することになるが、韓国では学ぶ語彙が教科書によってかなり異なっていることが窺える。しかし、韓国の教科書では1冊で学習する語彙全体の数が日本の約1.7倍であり、最終的にはどの教科書を使用しても数の上では日本より圧倒的に多くの語彙を学習しているということになる。

## 7. 語彙の量的比較から見えてくること

日韓の学習語彙を量的に比較した結果、韓国の教科書には日本の教科書をはるかに上回る語彙が登場することがわかった。今回調査の対象となった韓国の教科書はいずれも初学者向けの教科書で、例えば『Alles Klar!』の前書きには「大学の現実的な条件を考慮したもので、2学期間の授業で初級ドイツ語能力を習得するようにした…」とあり、1週間あたりの授業時間数は明記されていないものの、1冊の教科書を2学期間で終えることが前提になっている。今回調査対象となった日本の教科書は、広島大学では週2コマの授業で1年間（2学期）にわたり使用されている。したがって、数の上では韓国では日本の約2倍の語彙を1年間で学ぶことになる。また、学習する文法項目数も、資料4でわかるように、韓国の教科書4冊の平均が41.75（項目）、日本の教科書4冊の平均は26.5（項目）となっている。韓国では日本の約1.5倍の文法項目を1冊の教科書で学ぶことになる。

米井（1992）は、中学での初習の英語学習において3年間で習得されるべき新語の総数が学習指導要領で900～1050語とされていることを基に、大学生では多くの場合にすでに英語を学んでいることや大学の語学教育が持つ物理的制約を考慮した上で、「“Wortschatzarbeit”を意識的に行う」、「基本語彙が繰り返し現れるような教材で語彙が異なる文脈でとらえられ有機的に記憶に組み込むようにする」などを前提条件に、学習されるべき基本語彙数を年間600語程度と見積もっている。ただし、これはあくまでも基礎語彙であり、有機的な記憶を促す有意義な文脈を持つテキストを作り出すためには、その周縁部分としてその2倍から3倍程度の語彙が必要であるとしている。また、北海道大学で作成されたドイツ語授業指導要綱（1995）の4単位および6単位の授業用の語彙リストには、冠詞類や代名詞、数詞なども含めた803語が掲載されている。今回の調査では、教科書に現れる語彙として冠詞類や代名詞、数詞などは除外しており、米井もこれらを含めるか否かは検討されねばならぬとしているが、仮にこれらの語彙を含めるとすれば、今回調査した日本の教科書に現れる異語数は50～100語程度増え、平均して900語前後の語彙が使用されていると考えられる。実際に学習される語数がどれだけかという調査は行っていないし、語彙をどの程度能動的に使えるようになれば「学習した」ことになるのかという問題もあるが、あえて経験的に言えば、教科書に登場する語彙の半分から3分の2程度は少なくとも「書かれてある語を見れば意味は分かる」といったレベルで習得されているのではなかろうか。となれば、900語のうち450語～600語は1年間で学習されていると考えることができる。

Shin（2005）によれば、韓国ではいわゆる普通科高校における第2外国語としてのドイツ語学習のための学習指導要領<sup>4)</sup>が、教育部（日本の文部科学省にあたる）によって定められており、その第1段階（高校の第2学年以上での選択必修科目、高校の授業時間数で102時間<sup>5)</sup>）では、

学習語彙を500語、第2段階（高校の第3学年での選択科目で必修ではない。高校の授業時間数で102時間）では800語としている。

つまり、語彙数という観点からすれば、日本の大学で週2コマの授業を1年間履修した場合、韓国の高校における第1段階を終了した場合とほぼ同等のレベルにあるということになる。

## 8. 終わりに

今回の調査で、日本と韓国の教科書に現れる語彙数や文法項目はその数に大きな差があることが明らかになった。だからといって語彙数や文法項目を単純に増やすことは、様々な制約の中で行われる日本の大学のドイツ語授業にとって現実的ではないし、仮に増やしたとしても、それは学習者の負担を大きくするだけでなく、学習が表面的になってしまうなどマイナス要因のほうが多いと考えられる。

しかし、岩崎（2007）が指摘しているように、グローバル化と多言語・多文化主義が同時進行している今日では、高度な専門知識を持ち、同時に当該言語の文化圏と日本社会との架け橋となれるような人材を輩出することが大学には求められている。このような人材にとって高度な語学力を身につけることは必須であり、それを可能にするような授業を提供することが大学におけるドイツ語教育の役割の一つである。日韓のドイツ語教育を比較した場合、韓国では学習のスタートが1年ないしは2年早く、大学でさらに継続して学習すればさらに高度なドイツ語を身につけることができるシステムとなっている。また、大学で初めてドイツ語を学習する場合でも1年間でかなりの学習量が課せられるため、初修外国語として1年間ドイツ語を学んだ大学2年生を日韓で比較した場合、到達しているレベルに差があることが推測される。この差が、日韓のドイツ語を履修する大学生全般見られるのであれば、日本のドイツ語教育は韓国のそれよりもある意味劣っているということになる。この差を是正し、少なくとも大学を卒業した時点や大学院レベルで韓国の学生と同等な語彙や文法を習得させるためには、より多くの学習時間数を確保すると同時に、効率よい学習を可能にする教材やカリキュラムの開発が必要である。最も望ましいのは、中学・高校で第2外国語としてドイツ語が導入され、学習のスタートラインが揃うことである。大学においても、最初の学習段階である教養教育の枠内での授業時間数を増やすことが望ましいが、それが難しいのであれば、2年次・3年次において体系的に継続して学習ができるような授業をなるべく多く提供することで、より高度なドイツ語を身につけられるシステムを作る必要がある。

今回の調査は教科書のみが対象であり、韓国の教科書が実際にはどの程度の授業時間数でどのように用いられており、学習者がどのレベルに到達可能かといった実態調査が含まれていない。今後の研究ではそれらの調査も含めさらに詳細な調査・分析を行い、いわばアジアン・スタンダードなレベルのドイツ語はどのようなものかを探りたい。

## 注

- 1) 本研究は平成19年度科学研究費補助金基盤研究(C)19520490による研究成果の一部である。研究の目的は、東アジア諸国のドイツ語教科書の分析を行うと同時にそれぞれの国のカリキュラムや学習者の到達度を調査すること、またそれらの結果から、いわばアジアン・スタンダードなドイツ語教育とはどのようなものかを考察することである。本稿では語彙の量的調査のみを報告するが、本研究全体では、どのような語彙がどのようなテーマや文法項目の下で導入さ

れているか、またどのような頻度でそれらが用いられているのかといった語彙の質的調査も行う。加えて、今回比較の対象となった韓国の教科書4冊以外にも、ハンブルク大学サマースクール参加者が自国で使用している教科書を分析すると共に、参加者の学習歴や動機付け、学習方法や到達度に関するアンケートおよび聞き取り調査を行い、教科書やカリキュラムと学習者の到達度についてより詳細な研究を行う。

- 2) このコースはハンブルク大学アジア・アフリカ研究所 (Asien-Afrika-Institut) が主催している。日本人の参加者は2008年の場合60名まで受け入れるとしている。
- 3) 広島大学では一部の学科を除き、選択必修科目としての第2外国語4単位の履修が義務付けられている。ドイツ語を選択した学生は前期開講の「ベーシック・ドイツ語Ⅰ」(90分週2コマ)と後期開講の「ベーシック・ドイツ語Ⅱ」(90分週2コマ)を履修しなければならない。8単位を取得する学生は、この「ベーシック・ドイツ語Ⅰ／Ⅱ」に加え、ドイツ語が母語である教員の担当する「インテンシブ・ドイツ語Ⅰ」および「インテンシブ・ドイツ語Ⅱ」を履修する。「インテンシブ・ドイツ語Ⅰ／Ⅱ」もそれぞれ90分の授業が週2コマである。したがって、8単位を取得する学生は、週4コマのドイツ語授業を1年間受講する。
- 4) Shinによれば、韓国では中学でも様々な第2外国語を「裁量活動 (“ selbst bestimmbare Aktivitäten “)」の枠内で導入でき、日本語・中国語・ドイツ語・フランス語・スペイン語の授業が行われている。しかし「裁量活動」としての第2外国語を導入している中学校は、2003年の調べで4629校中218校、そのうちドイツ語を導入しているのは5校のみで、全体の約0.1%にしか過ぎない。最も導入校の多い第2外国語は日本語(183校)である。
- 5) 広島大学の韓国人留学生からの情報では、高校での授業は1コマ50分、中学では45分ということである。したがって、102時間という学習時間は日本の大学で週2コマを2学期間履修した場合とほぼ同時間数であると言える。

## 参考文献

- 石川克知・佐藤俊一編 (1995)：『言語文化部研究報告叢書4 特集 ドイツ語授業指要領』北海道大学。
- 岩崎克己 (2007)：「日本の大学における初修外国語の現状と改革のための一試案 ―主に、ドイツ語教育を例にして―」『広島外国語教育研究』10, 57-83. 広島大学外国語教育研究センター。
- SHIN Hyung-Uk (2005)：『Schulbücher für DaF in Korea: Bestandaufnahme und Probleme』In *Neue Beiträge zur Germanistik* Band 4/Heft 4. Japanische Gesellschaft für Germanistik
- 米井 巖 (1992)：「日本人ドイツ語学習者の為の基本語彙の選定条件」『ドイツ文学論集』13号, 42-60. 日本大学文理学部独文研究室

《資料1》日韓8冊の教科書に共通の語彙（140語）

Abend	finden	Mittag	und
aber	fragen	Mittwoch	Universität(Uni)
all	Frau	möchte	unter
alt	Freund/-in	morgen	viel
an	für	Morgen	von
anrufen	ganz	müssen	vor
arbeiten	geben	Museum	wann
Arzt/Ärztin	gehen	Musik	warum
auch	Geld	nach	was
auf	gern(e)	nehmen	Wein
aus	groß	nein	wer
Auto	gut	nett	werden
Bahnhof	haben	nicht	wie
Bank	Haus	noch	wiedersehen
bei	heißen	November	wissen
bekommen	helfen	Onkel	wo
Beruf	Hemd	rauchen	woher
besuchen	Herr	Restaurant	wohin
Bier	heute	schon	wohnen
Bild	hier	schön	wollen
bis	hinter	sehen	Zimmer
bitten	immer	sehr	zu
Buch	in	sein(動)	zusammen
da	ja	so	
danken	Jahr(e)	sollen	
dann	jetzt	spazieren	
Deutsch	Kaffee	spielen	
Deutschland	Kino	sprechen	
dort	Kleid	Student/-in	
dürfen	kommen	studieren	
dunkel	können	Tag	
erst	Lektion	Tasche	
essen	lernen	Tennis	
Essen	lesen	Tisch	
etwa	liegen	trinken	
fahren	machen	über	
Familie	man	Übung	
fernsehen	Milch	Uhr	
Film	mit	um	

《資料2》 韓国の教科書4冊に共通の語彙（130語，日韓共通は除く）

abholen	Gast	nur	Wagen
anfangen	gefallen	oft	Wald
ausfüllen	gegen	ohne	weit
Ausland	gehören	Park	welche
beide	genau	Physik	wenig
besonders	gerade	Platz	Wetter
bestellen	Germanistik	prima	wieviel
bestimmen	Getränk	Professor/-in	wirklich
bezahlen	Glas	Rathaus	Wohnung
brauchen	glauben	ruhig	zeigen
Brief	Gott	Satz	zuerst
bringen	Grammatik	sauer	zurück
Büro	halb	schade	zwischen
Bundesrepublik	halten	schicken	
Bus	hängen	schmecken	
Butter	Herz	schnell	
Cent	Japan	Schrank	
China	Japaner/-in	schreiben	
dabei	Karte	Schweiz	
dauern	kennen	sonst	
deshalb	Kind	stellen	
dick	klein	sterben	
einladen	Korea	Straße	
empfehlen	kosten	Stück	
Englisch	lang	suchen	
entlang	lassen	Tasse	
entschuldigen	laufen	Theater	
erzählen	leben	Tourist/-in	
etwas	Lehrer/-in	Tür	
Fenster	leicht	übrigens	
Flasche	leihen	verbieten(verbotten)	
fliegen	Leute	vergessen	
Flughafen	Mantel	verheiraten	
Fluss	Monat	verkaufen	
Foto	nachsehen	Verkäufer/-in	
Frankreich	Nacht	verlassen	
Franzose/-in	Name	versprechen	
Französisch	nennen	verstehen	

《資料3》日本の教科書4冊に共通の語彙（103語、日韓共通の語彙は除く）

abfahren	Herbst	schauen
ankommen	hören	schenken
April	Januar	schlafen
aufräumen	japanisch	Schwester
aufstehen	jobben	schwimmen
August	Juli	September
Ausflug	Juni	sicher
bald	Kamera	singen
Bibliothek	Kartoffel	Sofa
Brot	kaufen	Sommer
Café	Kaufhaus	Sonntag
CD	Kirche	spät
denn	klar	Stuhl
Dezember	Klavier	Supermarkt
Dienstag	kochen	tanzen
doch	Konzert	Tee
Donnerstag	legen	telefonieren
einkaufen	letzt	Tschüs
Eis	Lust	Vater
Eltern	Mai	vorhaben
Europa	mal	Vormittag
Februar	malen	warum
feiern	März	wieder
Fernseher	Meer	Wurst
Fisch	Moment	zurückkommen
Freitag	Montag	
frühstücken	müde	
Fußball	Mutter	
Geige	Nachmittag	
Geschenk	natürlich	
gestern	neu	
Gitarre	oder	
Großmutter	Oktober	
Großvater	Party	
grün	Post	
Hallo	Prüfung	
Handy	Rock	
Heft	sagen	
hell	Samstag	

《資料4》文法項目一覧

- = 一項目として説明または一覧などがある  
 ○ = 説明や一覧はないが掲載されている  
 \* = 少なくともいずれか一つが掲載されている

文法項目	韓国				日本			
	Alls Klar!	Deutsch Heute	Fröhliches Deutsch	Lebendiges Deutsch	Abfahrt	Ein Sommer in Hamburg	Farbkasten neu 1	Modelle neu 1
動詞の現在人称変化	●	●	●	●	●	●	●	●
定形の位置/語順	●	●	●	●	●	●	●	●
疑問詞	●	●	●	●	●	○	○	●
Welch...?	●	●	○	○				●
Was für ein...?	●	●						
命令文	●		●	●		●		●
名詞の性	●	●	●	●	●	●	●	●
名詞の複数形	●	●	●	●	●	●	●	●
定冠詞の格変化	●	●	●	●	●	●	●	●
不定冠詞の格変化	●	●	●	●	●	●	●	●
否定冠詞の格変化	●	●		●	●	●	●	●
人称代名詞の格変化	●	●	●	●	●	●	●	●
所有代名詞の格変化	●	●			●	●	●	●
疑問代名詞 wer の格変化			○	●				○
非人称の es				●	●			
3格の目的語をとる動詞	●	●	●	●			○	●
4格支配の前置詞	●	●	●	●	●	●		●
3格支配の前置詞	●	●	●	●	●	●		●
3・4格支配の前置詞	●	●	●	●		●	●	
2格支配の前置詞	●		●	●				
前置詞と定冠詞の融合形	●	○	●	●	●		○	●
指示代名詞 (der/die/das)	●	●	●	●		●		●
不定代名詞 man	○	○	○	○	●	○	○	●
不定代名詞 einer	●	●						
不定代名詞 welcher/welche	●	●						
不定代名詞 jemand/niemand*	○	●	○					
語法の助動詞	●	●	●		●	●	●	●
分離動詞	●	●	●	●	●	●	●	●
現在完了形	●	○	●	●	●	●	●	●
動詞の過去形	●	●	●	●	●	●	●	

話法の助動詞の過去形	●	●		●	●		●	
過去完了形				●				
未来完了形								
werden (動詞/助動詞)	●	●	●	●				
受動態	●	●	●		●	●	●	
話法の助動詞 + 受動態	●	●						
受動態の過去形	●		●			●		
受動態の完了形	●		●			●		
自動詞の受動態							●	
接続法第1式	●		●					
接続法第2式	●		●		●	●	●	
状態受動			●					
zu 不定詞の名詞的用法	●		●	●		●		
zu 不定詞の形容詞的用法	●		●	●		●	●	
zu 不定詞の副詞的用法 (um...zu)	●		●	●		●		
haben/sein/brauchen + zu 不定詞*				●				
副文/従属の接続詞	●	●	●	●	●	●	●	
間接疑問文	●	●	●		●	●	●	
形容詞の格変化	●	●	●			●		
形容詞・副詞の比較級	●	●	●			●		
形容詞・副詞の最上級	●	●	●			●		
同等比較	●		●			●		
形容詞の名詞化	●							
再帰代名詞	●			●	●	●		
再帰動詞	●			●	●	●		
使役の助動詞 lassen	●							
知覚動詞								
定関係代名詞	●		●			●		
不定関係代名詞 (wer/was)	●							
関係副詞	●							
現在分詞の副詞的用法	●		●					
過去分詞の付加語的用法	●		●					
名詞の2格	●		●	●	●			
derselbe	●							
項目数合計 (●のみ)	57	32	43	35	27	36	21	22
平均項目数	41.75			26.5				

## ABSTRACT

### A Quantitative Comparison of the Vocabulary in Japanese and Korean German Textbooks

Takako YOSHIMITSU

Institute for Foreign Language Research and Education  
Hiroshima University

Approximately 10 students from Hiroshima University, most of whom have learned German for two or three semesters, participate in a summer course held at the University of Hamburg every year. Those students study German with learners from Korea, Taiwan, and other parts of Japan. After the course, many of them comment that their vocabulary was insufficient, or that the Korean and Taiwanese students could speak German better.

It is a fact that many of the students from Korea and Taiwan attending this summer course are majoring in German in their own countries, whereas our students usually are not. This is certainly one reason for the Japanese students' perceived or actual inferiority in the language. However, there are other reasons for the problem, such as the textbooks used, styles of communication in their native languages, motivation and learning styles, and personal attitudes.

This article reports on a quantitative comparison of the vocabulary in Japanese and Korean German textbooks, which is part of wider research into the German textbooks used in East Asian countries. Compared with Korean textbooks, Japanese textbooks use a smaller number of vocabulary items. On the other hand, the Japanese textbooks contain more common or everyday vocabulary than the Korean textbooks. Altogether the four Korean and four Japanese textbooks investigated here contain only 140 common everyday words, and Korean textbooks contain twice as many words as Japanese textbooks. The findings show that learning a larger amount of vocabulary in Korea depends to a great extent on textbooks, and that while Korean learners may acquire a large vocabulary by the end of their studies, Japanese textbooks offer a much smaller vocabulary consisting of common everyday words.